

研究分野	資源生態	部名	漁場環境部
研究課題名	スルメイカ漁場形成早期予測手法開発調査		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H19～H23		
担当	黄金崎 栄一		
協力・分担関係	(独) 日本海区水産研究所、北海道区水産研究所		

〈目的〉

早期のスルメイカ魚群分布及び密度、海洋環境を把握することにより、効率的な操業を可能にするための漁況予測及び本県海域への来遊機構を明らかにし、いか釣り漁業者にとって重要な判断材料となるようなデータの蓄積と情報提供を行う。

〈試験研究方法〉

4月～10月にかけて、日本海及び太平洋において試験船による漁獲調査を実施するとともに、周辺海域の海洋観測を行い漁場環境の把握に努める。

また、資源評価のための基礎となる、イカ類の漁獲統計及び中型いか釣り船の漁獲データの整理を行う。

〈主要成果の具体的なデータ〉

試験船開運丸により延べ34回（一晚2回含む）の釣獲調査を実施した。

得られたデータは、漁況予測及び資源評価に利用すると共に、漁獲状況をリアルタイムで通報又は八戸無線局を通じて情報提供した。

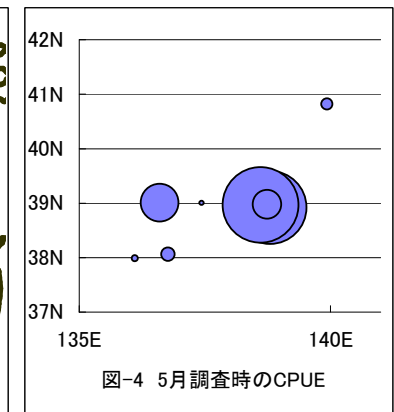
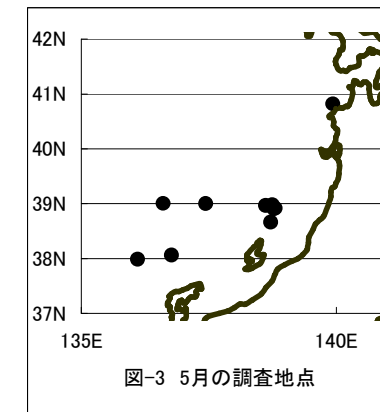
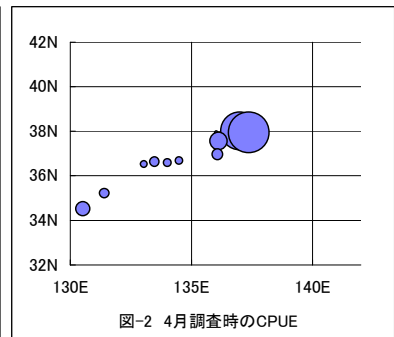
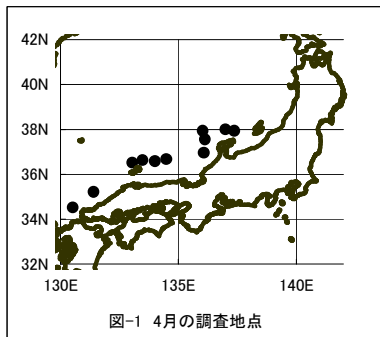
また、ウオダス（漁海況速報）を通じて関係機関等に対する情報提供も実施している。

スルメイカ北上期の4月～5月の調査結果を図1～4に示した。

4月は隠岐の北側海域と能登半島周辺海域で調査を実施したが、能登北側の38N・137.5E付近の海域でCPUE16.1～18.7の濃密群を確認した。

5月には39N・138.6E付近の海域でCPUE54.22の釣獲があり、約1ヶ月で漁場が1度ほどシフトしていることが確認された。

例年であれば、山陰及び隠岐の島周辺海域から漁場が形成されるが、19年度はすでに北陸から東北沿岸に漁場が見られ、今期のスルメイカの北上がかなり早いことが示唆された。



昨年 5 月の主たる漁場は能登周辺海域であり、北上スピードがかなり早いと評価されたが、今年度はそれ以上であった。

5 月の調査によると外套長組成はモードが 17cm にあり、30 尾入れ前後のスルメイカが主体となっていた。

この調査結果から、本県沿岸に来遊するスルメイカは前年を大幅に上回り、漁期も早いと考えられたことから、4・5 月に実施したスルメイカ学習会で漁業者に周知を図った。

一方、沖合のスルメイカに関しては分布密度も低く、隠岐の島周辺海域からの北上も期待できなかったことから、6～7 月の大和堆周辺海域の中型いか釣船の漁獲が前年を下回る可能性があった。

10 月 22 日から 30 日に 41-30N～42-30N で調査を行ったところ、CPUE は 1.8～6.3 尾の範囲にあり、日本海のスルメイカはこの時期まだ広い範囲に分散しているか、200 海里ラインの内側に多く分布していることが示唆された。

〈今後の問題点〉

本県でのスルメイカ漁況の早期予測を行うためには、4～5 月の日本海南方海域での漁獲状況及び入道崎以北の 5 月の漁況の把握が重要であり、そのためには更なる調査方法の改善が必要である。

〈次年度の具体的計画〉

漁況予測を重点に沿岸回遊状況の調査を念頭に置き、引き続き 19 年度同様の調査を実施する。

〈結果の発表・活用状況等〉

平成 17・18・19 年度青色発光ダイオード実証化試験報告書（財団法人日中新協定対策漁業振興財団発行）に内容の一部を掲載。

